

国語

情報を関連付け考えを形成する読むことの学習指導

-「英雄」を論じるテーマ読書を通して-

白子町立白子中学校（前睦沢町立睦沢中学校）教諭 にしがや 西谷 ますみ 真澄

学力・学習状況調査の結果等から、情報を関連付けたり自分の考えを表現したりする能力に課題があることが分かった。これらの課題に対応するためには、複数のテキストを関連付けながら読み、考えを形成する読書単元の開発が必要である。そこで、テーマ読書を通して情報を結び付け、考えを形成する力を育てる単元の開発を行った。目的に応じて選書し論点を立てて情報を結び付ける力を育成するための読書支援と、考えを形成するためのICTを活用した個別支援を行った結果、主体的に選書し、論点を立てて関連付けながら再読を重ね、自分なりの考えを表現する姿が見られた。今後は読書単元の有効性について多くの先生方と共有し、より系統的・継続的な読書指導について追究していきたい。

社会

問題解決の見通しをもち、 問い続ける子供を育てる社会科学習

市川市教育委員会主査（前市川市立大野小学校教諭） みやもり 宮森 けんじ 健治

「児童の問いと単元の学習問題が繋がらない。」そんな、学習問題設定の場面の悩みから、私はこの研究を始めた。児童が主体的・対話的に学ぶ単元展開モデルを具体化するために、「自分の問い」をもち続けながら「学習問題」を追究・解決できるよう「問いの構造化」を基にした指導計画の充実を図り、第4学年社会科「自然災害から人々を守る活動」の単元で検証授業を行った。その結果、児童は「自分の問い」と「学習問題」との関連性を意識して追究・解決の見通しをもつとともに、「自分の問い」を分類・集約した「追究課題」の解決を通して対話しながら問い続ける姿が見られた。今後は、この単元モデルを検証していない内容でも実践を重ね、研修会等で成果を広めたい。

生活

「自然や物を使った遊び」の単元開発

-児童と教師が共に学習内容をつくり出していく授業の在り方-

袖ヶ浦市立昭和小学校教諭 あだち 足立 あい 垂伊

生活科の単元づくりの方略を明らかにするために、小学校第1学年に向けて、「教材」「教育目標」「教育目的」の3つを基に構造化した単元づくりを行った。こまを教材とし、授業の中で「わざ」を獲得し、その「わざ」を自分たちの力でさらに高められるような教材を提起することによって「イノベーション」を起こし、探究が続いていくようにした。「友達もできるようになって一緒に遊びたい」という強い思いをもった児童の学び合いにより、皆でひもごまを回せるようになっていった。今後も単元開発を行い、主体的・対話的で深い学びを児童と共に目指していきたい。また、授業づくりに悩んでいる先生方の一助となるよう情報を発信していきたい。

図画工作

造形遊びの定着を目指した素材と場、教師の役割の設定

- 図画工作科においての地域のRemidaを目指して -

八千代市立高津小学校（前睦小学校）教諭 ^{ありふく} 有福 ^{えりか} 絵里加

研究、調査をしていく中で「造形遊び」の実施率の低さに危機感を感じた。また、それは教師の困り感が要因であるということがわかってきた。その困り感へのアプローチとして、「素材や材料、場の設定」「授業の中での教師の役割、言葉掛けの設定」を研究し、講義や実技研修等を実施し、その都度意識調査を行った。そして、それらを造形遊び実施マニュアルと貸出セットにまとめ、どんな職歴の教師でも実施できるように手立てを講じた。その結果、教師の「造形遊び」に対する意識の変化、実施に対する意欲の向上が見られた。これから、講義、実技研修、授業参観を随時行い、造形遊び実施マニュアルと貸出セットを提供していくことで、よりその意識が高まっていくことを確認していきたい。

体育

「共生」の視点を重視したゴール型サッカーの学習に関する研究

- アダプテーション・ゲームにおける児童のゲームパフォーマンスに着目して -

四街道市立大日小学校（前佐倉市立間野台小学校）教諭 ^{ひかさ} 日笠 ^{りょうた} 良太

社会の多様化が進み“VUCAの時代”といわれる今日、共生社会の実現に向けた教育の推進が求められている。そこで、小学校高学年ゴール型ボール運動「サッカー」の学習においてアダプテーション・ゲームを取り入れることで、共生の意識が育成され、各自のゲームパフォーマンスが向上するのかを明らかにするため、小学校6年生を対象に授業実践を行った。

その結果、アダプテーション・ゲームが共生の意識を育成する手立てとして有効であり、ボールを持たないときの動きの習得にもつながることが明らかになった。今後は、本研究で得られた成果を広めていくとともに、運動領域や対象学年を広げることで、共生社会の実現に向けた体育科の学習の在り方を追求していきたい。

小学校外国語

英語音声と文字をつなげる明示的な音声指導の在り方

- 自ら気づき、発音できる児童を目指して -

茂原市立茂原小学校（前東郷小学校）教諭 ^{わたなべ} 渡邊 ^{しの} 志乃

児童が高学年になると、自分の発音に対して不安に思い、英語を話すことに抵抗を感じる様子が窺えた。そこで、児童の英語音声発音の向上を目指して、小学校6年生の外国語科の授業において、明示的な音声指導を帯活動と単元学習のゴールに向けた活動で行い、その効果を検証した。明示的な音声指導を通して児童は、英語音声の特徴に気付いたり、音声と文字のつながりに気付いたりしながら英語らしさを体感した。その結果、児童が英語を話したり、発音したりすることの意欲へとつながることができた。今後は、読み書き指導の初期段階としての音声指導の在り方を広めていけるようにさらに研究を重ね、研修会などで作成した教材や資料などを紹介していきたい。

発達障害

発達障害の可能性のある生徒のための、高等学校普通科
で自己理解を深め進路決定を支援する方策

-生徒が目標をもって高校生活を送り、見通しをもった進路選択につなげるために-

県立湖北特別支援学校（前県立鎌ヶ谷西高等学校）教諭 たかはし ひろこ
高橋 裕子

私は高校教員となって以来、学業不振や出席時数不足、生徒指導上の問題等によって学校を去って
いく生徒を見るたびに、どのように支援をすれば継続して通学することができただろうかと自問自答
してきた。その中には発達障害の可能性が疑われる生徒も少なからずおり、学校生活上のつまずき
につながっていた。そのような生徒の学習や生活上の困難さを取り除いて高校卒業へと導き、社会生活
へ適応するために、「キャリアアッププログラム」を作成し、実践検証を行い、効果を認めた。今後は
wakaba掲載の「キャリアアッププログラム」を広め、多くの学校で活用していただき、生徒が自己
理解や他者理解を深め、コミュニケーション力を向上し、学校生活を前向きにするキャリア支援に役
立てていく。

特別支援教育課題

特別支援学校に在籍する児童生徒の自助・共助の
力を高めるための防災教育の在り方

県立大網白里特別支援学校教諭 かわな しゅん
河名 俊

特別支援学校に在籍する児童生徒にとっての自助・共助の力を明確化し、それぞれの力を高めてい
くために、どのような防災教育（授業、活動、支援等）を実施することが有効であるのかを明らかに
することを目的として、生徒、保護者、教職員への質問紙調査や検証授業を実施した。その結果、自
分から災害に応じた避難行動をする姿や家庭で自分にとって必要な備蓄品等を準備する姿などの変容
が見られた。これらのことから、特別支援学校に在籍する児童生徒、保護者、教職員等の防災に関す
る「自守・共守（自助・共助を基に定義した語）の力」を明確化し、それぞれの力の向上を図ること
ができた。

安全（防災）教育は、平時の備えが重要であることを意識し、日々実践していく。

特別支援教育課題

中学校通常の学級における意思の表明を
起点とした合理的配慮の提供の在り方

-特別支援教育コーディネーターの学級担任支援を通して-

松戸市立小金北中学校教諭 よしかわ ゆうこ
吉川 祐子

インクルーシブ教育の推進には、通常の学級での個々に合わせた学び方や環境の調整が求められる。
そこで、特別支援教育コーディネーターの合理的配慮の提供における支援を受けた通常の学級担任へ
のインタビュー内容を分析した。その結果、彼らが障害や困難のある当事者生徒の意思の表明や対話
を通して、生徒の視点を獲得し、生徒の抱える困難に対する理解を深めることがわかった。同時に、
インクルーシブな学級の雰囲気も醸成された。また、特別支援教育コーディネーターが「生徒への意
思の表明支援」を行うことで、学級担任による円滑な合理的配慮につながる。今後は、継続した実践・
検証とともに、地域の研修会等で研究内容の紹介をしていきたい。

特別支援教育課題

中学校通常の学級「外国語」授業における生徒の注意集中の変容

-授業のユニバーサルデザインに基づく支援の手立てを通して-

印西市教育委員会指導課指導主事（前印西市立原山中学校教諭） りきまる まきこ 力丸 真紀子

「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（2022）」では、小中学校において、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は推定値8.8%と報告された。そこで中学校通常の学級の「外国語」授業において、ユニバーサルデザインに基づく支援の手立てを講じることで、生徒の注意集中がどのように変容するかを明らかにしたいと考え研究に取り組んだ。その結果、ユニバーサルデザインに基づく授業では、障害や困難の有無に関わらず、抽出した全ての生徒の注意集中が向上することが示された。今後は、通常の学級において生徒の実態に応じた指導方法の検討をするとともに、「外国語」授業のユニバーサルデザインについて広く発信していく。

企業等派遣

企業の経営手法から学ぶ学校教育目標 具現化のためのマネジメント

野田市立川間小学校（前東部小学校）教頭 こばやし まこと 小林 真

仕事に主体的に取り組み、同僚と積極的に関わる中で、教職では学び感じる事ができない部分を言語化してきた。企業で学んだマネジメント手法を生かして、教職の価値を高めるマネジメントで学校現場に還元したいと考え、研究主題を設定した。今後はマネジメントの具体策として4点実践したい。①端的な学校教育目標で、学校、子供、保護者・地域が共に成長していく循環モデルを作る。②目標達成のため資源配分しない部分を決め、職員の裁量時間を確保する。③仕事の縮減・効率化をテーマに「かえる会議」を実施、業務を適宜見直す。④学校電話の自動通話録音と緊急時以外の電話応対時間を設定し職員が子供と集中して向き合える時間を確保する。この実践で学校をより価値の高い職場へ変えていきたい。

企業等派遣

派遣企業から学ぶ 組織マネジメントとホスピタリティ

市原市立市西小学校校長（前ちはら台西中学校教頭） おおひら てつや 大平 哲也

現代はIoT・ビッグデータ・AI等の普及・進展により、各企業は様々な変革を求められている。そこで学校を離れ、企業の事業活動に対する考え方等について理解を深め、その体験を教育活動に活かしたいと考えた。研修先であるホテルポートプラザちばでは、経営方針を明確にし、宿泊課、営業課など連携してキャンペーンを実施し、その成果や課題をフィードバックさせPDCAサイクルを活用して業務実績を向上させている。その組織マネジメントやホスピタリティ（おもてなしの精神）を第一にした接客、業務改善などを含めた職員の意識改革の手法について研修することができた。この1年間で学んだことを取り入れ、「特色ある学校づくり」につなげたい。

チーム担任制は教育臨床において、 どのような効果があるのか？



柏市立酒井根中学校教諭 ふるやま あゆみ 古山 歩美

1 はじめに

本研究における「チーム担任制」とは、年度当初に受け持つ学級の担任として固定させず、教員がローテーションをし、所属学年全ての学級担任を務める担任制度である。

中学校における「チーム担任制」の導入は、千代田区の麴町中学校において2018年度から実施され、注目を集めた。「チーム担任制」は、生徒の自律促進や多面的な児童生徒理解にとどまらず、教職員のOJTが可能となることや、年休取得の促進にも関係があることが見えてきた。このように、「チーム担任制」は様々な良い効果の可能性を秘めているため、その効果を知りたいと思い、本研究に踏み切った。

2 本研究について

本研究では、①期待できる生徒への効果は何か？②期待できる教師への効果は何か？③効果的に作用する条件は何か？④阻害要因は何か？これら4つの問を解決すべく、「チーム担任制」を実施している中学校9校と小学校2校、市内全校で「チーム担任制」の導入を行っている3市教育委員会の合計14の関係機関の職員を対象として、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。質問項目は、①必要性、②導入の経緯、③実施方法、④成果と課題、⑤実施する上での工夫点、⑥組み合わせ合わせて実施していること、⑦実施マニュアルの有無、⑧不登校支援における効果、⑨考えていることの9項目とした。そして、効果的に実施できる「チーム担任制導入ガイドBOOK」を作成した。

3 まとめ

本研究において明らかとなったものを表1に記載する。「チーム担任制」には、基本形といった特定の型がなく、導入するには生

徒・保護者・地域・教職員の実態をとらえ、ニーズ（必要性）に合っているかどうかが重要である。そして、教職員が目的の共通理解のもと同一歩調で進めていく必要がある。マネジメントを行う教員は、副作用（課題）を減らしながら効果を上げられるよう、生徒理解だけではなく、職員の長所や特性の理解が求められる。また、「チーム担任制」は教育相談だけではなく、生徒指導や特別支援への効果など、非常に多くの可能性を秘めている。

〈表1〉本研究で明らかとなったこと

① 「チーム担任制」の効果	
生徒	・「チーム担任制」に対する生徒の満足度が高い ・相談の受け皿が広がる
教師	・児童生徒への多面的な理解や支援 ・生徒の悩みの早期発見 ・同僚性向上による心理的安全性の効果 ・不安の軽減と業務の負担軽減
② 「チーム担任制」の促進要因	
	・情報共有 ・相談窓口の設定 ・学年マネジメント ・教育委員会等のバックアップ
③ 「チーム担任制」の阻害要因	
	・学年経営の不統一 ・責任感の希薄化 ・教員の合意形成が不十分

4 おわりに

「チーム担任制」は導入したらよい効果が得られるというものではない。しかし、「チーム担任制」は、導入の仕方や、運営の仕方により非常に多くの可能性を秘めており、現代の学校現場が抱えている課題に対し有用な取組である。学校教育に求められるものが多様化してきた現代において、担任制度においても日本の社会や現在の子供にあった体制へ変革させる必要があるのではないだろうか。

〈参考〉
チーム担任制ガイドBOOK 二次元コード→

